

公益社団法人私立大学情報教育協会  
平成 26 年度第 1 回大学情報システム研究委員会議事概要

- I. 日 時：平成 26 年 9 月 17 日(水) 15:00 から 17:00 まで  
II. 場 所：私情協 事務局  
III. 参加者：疋田担当理事、岩井委員長、藤本委員、小川委員、森本アドバイザー  
アドバイザー賛助会員：(株)富士通マーケティング  
事務局：井端事務局長、野本、藤江（記）

IV. 検討事項

委員会として、学修ポートフォリオに求められる機能・役割を整理し、情報システムとしての学修ポートフォリオの構築・運用に伴う、留意点及び課題について、年次計画で研究する。

今回は、大学情報システム研究委員会 学修ポートフォリオに対する理解の促進に向けて(中間まとめ)の提言を受けて、今後の検討事項と検討の進め方について、意見を交換した。

1. 学修ポートフォリオの導入に向けた検討事項について

- ・最初は実践例を学ぼうという立場で検討してきたが、多彩過ぎて一つにまとめられない。
- ・今後も先行事例を学ぶ必要はあるが、私情協版のポートフォリオの進め方を提示する方向で検討した方が良いと思われる。それを念頭に置きながら議論したい。
- ・ラーニングポートフォリオを主体的にするのか、学生自身の時間管理、生活管理を主体とするのか、或いはキャリアにするのか、全部を纏めた「見える化(IR)」にするのか？決める必要がある。全部を一度に実施するのは難しい。
- ・大学や、所属する学生にとって、いったい何が必要なのかということ进行调查して方向性を一本化する必要がある。
- ・ラーニングポートフォリオは学修過程を記録し、担当教員がコメントを残していく事で、科目単位での実施が可能だと思う。自己生活、管理系やキャリア系となると横断科目にて実施しないと厳しい。横断科目のないところで実施させても続かないと思われる。
- ・ラーニングポートフォリオを主体として考えた方が良いと思う。
- ・カリキュラム構造で年度や科目を超えて、成長や理解をチェックできるシステムであれば良いので、全ての科目で実施する必要は無い。
- ・大学側と学生側両方で Semester 毎等の単位でデータを振り返り確認する事が重要だ。
- ・私情協として短い時間で定時を行おうとするとラーニングポートフォリオに特化されると思うが、前提として大学のニーズによって、どこにポイントを置いてポートフォリオを構築するかは大学のニーズによる。ラーニングにポイントを置くとなると、こんなやり方がある、と提示するところに落ちつくと思う。
- ・授業外のキャリアや学生生活まで入っていくとかなり考え方が変わってくる。今後の整合性を考えても、今回はラーニングポートフォリオに焦点を当てるべきと思う。
- ・学生が書いた内容を大学が責任を持ってフィードバックできるような事項から実施し、記録することの有用性をわからせることが大切。何かあれば、学生アドバイザー等がチェックをしていくことも大切だ。
- ・ポートフォリオに記入することの意味や意義が明確にわかってくると、学生は様々な事柄に関しても積極的に実施してくれるようになる。
- ・科目に関連付けないと記入してはくれない。アルバイトのことなどは、科目に関連付ける

ことが出来ないのが難しい。

- ・専門科目の中で、基幹科目のような、学科・学年で帯となっているものであれば実施できると考える。
- ・学生や教職員の負荷を考えた場合、必須科目に限定するのは妥当だと思う、その時に1～4年生までの学士課程を考えたときに1年次には基礎演習等、全員が受講する科目で実施する。2～4年は専門必修科目等にて実施する。
- ・4年間で何を対象として実施するのかの流れを決めて実施する必要があるのではないかな。
- ・1年次は基礎演習等で実施し、大学にきちんと来て、学ぶ習慣付けをする必要がある。
- ・実施する科目はミニマムに限定してやらないと、学生自身が継続してやってくれないのではないかなと思う。
- ・私情協の考えるポートフォリオを提案するのは賛成だ。そうしないと集約しない。
- ・色々な大学でうまくいっていない事例を見ると、ワークシートの記入等を少なくとも学生は自分の為と思っていない状況がある。「やってやってる」、「言われたからする」等、記入することが目標となっている。記入すること自体が学修だ。この授業をとった目的や、理解の振り返りの仕方を提示しないとワークシートだけ配っても、当たり障りのないことだけを記載して終わってしまい、最後に見える化した時に意味のないものになってしまう。
- ・表現することは非常に大切だ。表現することで別の力が身に付いていることを理解させる必要がある。表現力は育成しにくい能力である。
- ・授業デザイン自体の中に、どうポートフォリオを組み込むかというモデルも併せて提示する必要がある。
- ・ポートフォリオに事業改善の効果があるといっても、先生の教育観はなかなか動かせない。
- ・学生が如何にポートフォリオを使ってアクティブラーナーになっていくのか注目すると、15回の講義をみたときに先生の役割は大きく変わらないのかもしれないと思う。学生を動かす仕組みを提示する事が大切だ。
- ・一つの単元が他の科目と、どう繋がっているのかの明示が大切。組織的に取り組まなければならない。
- ・実施すると多くの情報が集まってきて、数年は厳しいと思うが、傾向がわかってくればポイントを掴める。それを学科、学部全体で見られるようにしたい。
- ・シラバスの中で学修ポートフォリオに取り組む必要性に関しては、授業デザインに主眼を置いて議論が必要だ。カリキュラムマップの上で、どの科目はどの力を身につけたいのかを目標として設定することが前提で、それをポートフォリオを使ってどう実現するのかを明確にしなければならない。
- ・各学科の4年次までの柱となるような基幹科目を全学含めて連続して測ってみるのも重要だ。

## 2. 学修ポートフォリオデータの活用に向けた検討事項に関して

- ・学生にどう活用させるかは「1. 学修ポートフォリオの導入に向けた検討事項について」で説明しており、「2. 学修ポートフォリオデータの活用に向けた検討事項に関して」に関しては、教員向け・組織向けの内容となる。
- ・ポートフォリオを使わないと15回の講義が完結しないような仕掛けが必要だ。
- ・有効性を確認するモデルについては、データベース化されたものをどのように読み取るか、ということだ。IRにも関わってくる。
- ・アクティブラーニングのような形でやらせるにしても資源を集中して投入する科目が発生

する。学部・学科の予算では実現は難しい。

- ・科目別で予算を取り、連携させていく仕組みがないと正確に評価できない。
- ・改善策をフィードバックすることに関しては難しい話だが、例としては、授業アンケートでの意見に対してその学期の終わりに全教員が WEB 上で、次回の改善策を書くことになっている。提出されない場合は「未提出」と記載される。学生にも当然公開される。
- ・シラバスに改善計画を書くのは仕掛けとして難しい。
- ・シラバスに改善計画やポートフォリオの必要性を書き込むことは、学生にモチベーションを与えることになる。先生が見本を見せるということであり、半学半教のようなイメージだ。教員側の意気込みを学生に見せるということ。
- ・有効性確認においては、例として授業点検シートというものが教員に課せられている。授業点検シートは授業アンケートと連動しており、学生のコメントに教員の反応を電子化して公開する。それは全ての科目に該当する。
- ・問題はそれを誰がみて、誰が点検するかだ。
- ・カリキュラムの大幅な改定があった時にはチェックするが、恒常的に実施するのは難しい。
- ・例として複数の担当で横断的な科目におけるワーキンググループを作り、若手を投入し、その先生方に自分の専門外の科目にて考えさせて、責任を持たせてやっている。
- ・授業の有効性の確認は「1. 学修ポートフォリオの導入に向けた検討事項について」に大きく関わってくる。15回の授業をどのようにデザインするのか。その中でポートフォリオをどのように活用するのか。ということが結果にどう出るのかということだ。1. が明確になれば何を見れば効果があるのかということが見えてくる。1. を定めないと授業の有効性、方策が見えてこない。
- ・ただ、授業デザインも様々で内容も点検できない。フォルドも違うし、授業の目標も違う。授業デザインを描いたにしても、机上の話になってしまう恐れがある。よって、授業デザインにはあまり踏み込まない方が良いのではないかと思う。先生方の自由裁量の部分に立ち入ることになるのではないか。又、授業が画一的なものとなり、面白みのないものになってしまう心配もある。デザインのチェック(判定)も難しい。
- ・授業のデザインをそれぞれの先生が責任を持ってしっかり実施する、ということを明確にさせる。授業デザインの改善は大切だが、授業デザインのモデルとなると厳しい。
- ・授業デザインの改善の中で、ポートフォリオを使うイメージを出してみればどうか。
- ・誰が点検するのか、という問題は大学のアキレス腱として残っている。
- ・そこを、少しでも工夫することが出来ないかということを考え、atmosphere 的に教員同士で日常的に意見交流できるような仕掛けは考えられないか。
- ・SNS 等を利用して意見交換できるような雰囲気醸成、失敗例を含めて報告する等が重要だということを提案するのは良いのではないか。モデルまで踏み込むと多様過ぎて対応できない。講義科目なのか、PBL なのか、実験なのか、ゼミナール等の講義の形態によって各教員が創意工夫する。シラバスのつくり方についても教員の意気込みや改善策を示すようなもの、となるのではないか。

### 3. 学修ポートフォリオシステムの運用に向けた検討事項について

- ・日本の大学が抱える問題の一つとして、色々なシステムが別々に走っていてデータベースのリンケージが全くできていない事だ。
- ・システムは時間割とリンクしていて蓄積率でみえるのが理想で、それを理想形として提示することはできる。

- ・理想形のイメージは、今からポートフォリオを導入しようとする大学に理想を見せると混乱してしまうのではないか。
- ・市販パッケージなのか、自前構築なのか、オープンソースなのかのメリット、デメリットは明確にした方が良い。
- ・これからポートフォリオを実施しようという大学は、オープンソースが良いのではないか。
- ・市販品も、オープンソースも結局カスタマイズすることになる。ノンカスタマイズでの運用はあり得ないのではないか。自前なのか、市販カスタマイズなのか、バランスの問題だ。
- ・データのリンクが大切だが、大学のどこにどんなデータがあるのか。以前、情報流通マップが必要だという議論もあった。IRを意識すると、情報流通マップは必須だ。
- ・データの連携は片手間では出来ない。学内のシステムの統一化は難しいので、「データの構造を組織内で明確にする」、「データの引き渡しの方法を考える」ということが大切だ。
- ・各種のデータの中で、その数値とどの数値を見ればなにがわかるのか、というイメージを次の段階で示したい。
- ・学修ポートフォリオに踏み出せない大学もある。どこから手を付ければ良いのかわからないので、指針を示してもらえれば有り難い思う。

#### 4. 学修ポートフォリオを組織的に持続・発展させるための検討事項

- ・教学マネジメント・ガバナンスの話だ。教員の意識変革は非常に難しい話だ。
- ・意識変革は難しいので、仕組みの変革から意識を変えていくようなことから始めることも考えられる。シラバスのやり方を全く変えたり、学部学科横断の科目を作り進めたりすることで、だんだん意識が変わってくる。システムを少しずつ変えながら意識が変わるのを待つような話だ。
- ・「4. 学修ポートフォリオを組織的に持続・発展させるための検討事項」は、1, 2, 3の上になり立つ話なので、時系列的に見て最後の方に仕上げとして出てくるものではないかと思う。

#### V. 検討の進め方について

- ・「1. 学修ポートフォリオの導入に向けた検討事項について」の中で優先的な「(1) シラバスの中で学修ポートフォリオに取り組む必要性の説明モデルの例示作成」について、どのような形で説明をしているのか、のモデルを藤本委員からご提供頂く事となった。また、「(2) 学士力の修得状況を自己点検できるようにするワークシートの例示作成」に関してワークシートのフォーマットのモデルを藤本委員と小川委員からご提供頂く事となり、各委員からはメーリングリストにて必要性・意見・事例等を情報提供することとなった。
- ・ご提供頂ける情報等は10月10日(金)までに岩井委員長に資料・意見を集約し、その後纏めて頂く事となった。

#### VI. 今後のスケジュール

- ・今後の委員会は以下の日程となった。
  - 第2回：26年10月29日(水) 18:00～
  - 第3回：26年12月12日(金) 18:00～
  - 第4回：27年1月20日(火) 18:00～(仮予定)

以上